



今村紫紅の追懐

安田 鞠彦

妙なる縁故に  
人合ひとなつたから、  
今村紫

紅と私とは  
用事人の生涯を通じ  
離れかた

程の密接な交  
渉を有つたのである。  
それ故に

同恩の予は、  
随分仔細な情を知つ  
て居るせゐる

あるだらうが、  
明治大正の美術界を  
通じぬも

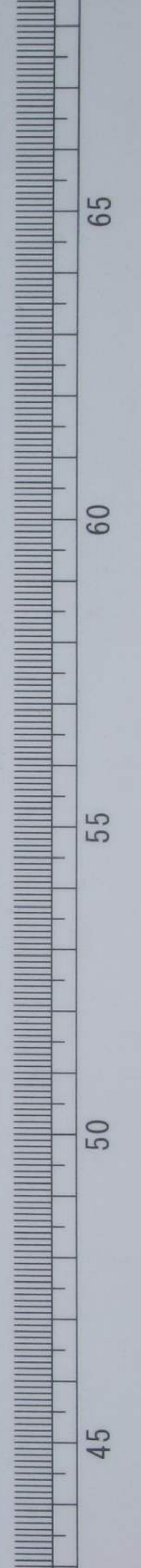
痛惜される一人  
として惜しむべし  
切切

ない。事実、  
画家として  
天の曲を穿たぬ人の

98.0 153

本間文庫  
文庫 14  
A183

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19





ところ、斯くおからうといふ。至極道理不  
 ぬふのべ、いろいろ相談したり。様子をお  
 ぬふつたりし、ここ十年の知己のやうな  
 係生じ、それからの會は、この兩人を加へる  
 事子した。もし、今村紫紅の入る以上、紫  
 紅會はまがいのべ改定する事子あり、爾來  
 「紅會」といふ事子なつた。  
 それから、紅會は何回か續いたが、約の  
 如く、今村君も會の中絶とし、活躍し、こ  
 こ下小堀君然のみにない大同團結が出来たゆ

しかし、報告先生の藝術に感心し、おた  
 しく、やがて一通り観覧の後、おれおれ  
 吾々子挨拶をし、件向子入水へ普水ぬか  
 といふ儀し、お前をきくと、その見知らぬ真  
 年の一人は今村紫紅、一人は葦川楓軒といふ  
これは故人  
とある子ありあつた。  
 心、懐しと見ると、始めは馬鹿にしへじや  
 カシ半分来へ見たのだが、仔細を見ると、紫外  
 子も向ふ子ないものが、此方子あり、此方子不  
 いも子を向ふは有つて、おれ相交つたら吃交構  
 『行樂』原稿用紙

子愛弱を極め、今村君のごとき殊に夏の毒に  
 あつた。同君は、止むなく老菓鋪に塩漬し子供  
 軟され、そこの中菓子の粉を中々に食して  
 の摸称を描<sup>い</sup>りしん。此、兄卒の菓子がいよ  
 く同君の畫室のこゝにあつた。また殊に多くや  
 つたのは、~~某~~ <sup>某</sup> ~~菓子~~ <sup>菓子</sup> 未れは無服物の包み  
 線のペーパーの摸称を描いたものである。この  
 反物の包紙意匠は、東西の無服衣子隨分多く  
 出たものと見え、今村君の外堅の意匠のたい  
 ぶいらんふ人が描かれたやうである。而かも

通

中心にある。い、自然の各々は恐急になつたが、  
 會堂中へも今村君と私とは特別昵懇になつた。  
 今村が二十二歳、私が十八歳の時分、彼は  
 新橋五郎兵衛町に住ひ、私は本橋物右衛門  
 町に居り、互ひに隣接して居るの心交情殊に濃  
 密になつたのをよく覚えている。  
 たしか、その頃住ひ、橋本達方氏等は、  
 常盤木俱楽部で據つて烏合會を結ぶ、<sup>此</sup> <sup>時</sup> <sup>の</sup> <sup>代</sup>  
<sup>友</sup> <sup>時</sup> <sup>の</sup> <sup>代</sup> 一執力であつた。その人々とも折り  
 々々交遊したるべあるが、當時の生活はまこと



があつても、思はず平氣にゐた。この辺りまで  
 と子徳翁たる同君の人格感服が惚れぬと思  
 つた。  
 自分とは、前子も迷へたやうに近所に居つた  
 予多心の出入りなども自然共小したる多し、後、  
 同時子小田原の海岸子家を移して更に親交を  
 加へた。併し、一年半ばかり居る中、今村君は  
 是非の斐つた風物に融れ入来去いと去かす心即ち  
 へ行つた。一ツ子は、<sup>海を渡り</sup>離れたと云う入  
 行つて本多子の本の新界を見たいといふ考

「行樂」原稿用紙

へかすべもあつた。をして、帰ると、目黒の方  
 へ移り、晩年までここに居られた。  
~~今~~子しん思ふと、愈々去る年々あつた、  
 大正 年の新年會の時もある、疾うに解散し  
 た紅児会心はあつたが、例によつてその款を  
 催した時、巾が今村君の款に元氣なく、いつ  
 子なく累が薄かつた。それからは向も去くやうに、  
 若き天才作家は長逝したのだが、金くホツキ  
 リ折れやうな折れ方であつた。その二三年  
 前、横山さんや、小杉未醜君等と東海道行脚を



